

役行者の孔雀明王像

谷口 耕生（当館研究員）

昨秋、石川県立美術館において特別展「法隆寺の名宝と聖徳太子の文化財」が開催され、国宝三点、重要文化財五十三点を含む百件以上の宝物が法隆寺から出陳された。奈良国立博物館は学術協力の形で企画段階から関わり、私も宝物の点検・展示等の作業に立ち会う機会を得た。

展示会場を見渡して改めて感じたのは、古代から中世・近世と各時代にわたる文化財が、これほどの高い質と量をもつて寺院に伝えられたことに対する驚きだった。それは法隆寺が、聖徳太子信仰を中心として、様々な信仰を支えられながら悠久の歴史を刻んできた結果なのだろう。特に仏教絵画の質の高さは目を見張るものがあり、一般にはあまり知られていない中世における法隆寺の信仰の姿を物語る品々も少なからず含まれていた。

中でもひととき私の心をとらえたのが、絹本着色孔雀明王像



(1) 絹本着色孔雀明王像 法隆寺



(2) 絹本着色當麻曼荼羅縁起(部分) 當麻寺



(3) 同上

（重要文化財 挿図1）だった。翼を大きく広げた孔雀の背に坐る明王の姿を描いたもので、肉身に朱の隈取りを施したエキゾチックなその姿は、見るものにひととき強い印象を与える。さらにこの絵で特徴的なのは、一般の孔雀明王像が正面向きであるのに対し、明王も孔雀も向かつて左斜めを向いていることだ。こうした特色ある孔雀明王像については、これまで他の作例が全く紹介されてこなかった。

ところが最近、奈良国立博物館に寄託されている奈良・當麻寺所蔵の絹本着色當麻曼荼羅縁起（重要文化財）を詳しく見る機会があり、たまたまその一場面に法隆寺本とよく似た孔雀明王像の画像が描かれているのを見出すことができたので、ここに紹介したい。その場面（挿図2）は、當麻寺が建つ二上山東麓の地がもともと修験道の開祖・役行者の土地で、長年にわたって孔雀明王の秘法を行っていたことを伝えるものである。役行者が孔雀経法を行ったことは、呪術的能力に優れた山林修行者であることを象徴する事績として、後世の縁起類や説話集でたびたび語られてきた。

画面は、山中の小堂内に役行者の姿を描いており、堂内には孔雀経法の修法壇の様子が見えている。そして、まさにそこに描かれる孔雀明王像（挿図3）こそが、法隆寺本に極めてよく似た姿で表されているのである。孔雀明王の肉身に朱の隈取りが施

されている点、明王も孔雀も向かつて左斜めを向いている点は、他に例がないとされた法隆寺本の特色をよく踏襲している。當麻曼荼羅縁起は法隆寺本と同じ鎌倉時代、十三世紀後半に描かれたと考えられ、同じ南都に伝来しているなど共通点が多いことから、両者に描かれる孔雀明王像の図像がほぼ一致するのをただの偶然として見過すわけにはいかないだろう。

そこで注目したいのが、法隆寺という寺院が中世において修験道の重要な拠点となっていたという事実だ。中世の法隆寺は興福寺の強い影響下にあつて、興福寺が統括していた大峰山修験の先達寺院として多くの修験者が往来していた。そして當麻寺も、葛城修験の重要な聖地である二上山を背後にひかえ、南都における修験道の一大拠点となっていたのである。こうした地理的にも近い法隆寺と當麻寺については、近年の研究によつて、修験道を通じた密接な往来があつた実態が明らかになりつつある。こうした事実を踏まえるとき、法隆寺と當麻寺に極めてよく似た孔雀明王の図像が継承された背景に、南都の修験道系寺院を中心とひろまった、役行者が行ったとされる孔雀経法に対する信仰があつたとは考えられないだろうか。つまり法隆寺本の特色ある姿は、「役行者の孔雀明王」として權威付けられたものだったと想像してみたいのである。

飛鳥文化の殿堂というイメージが圧倒的に強い法隆寺に、このような修験道との関わりをうかがわせる宝物が伝わっているという事実は、意外に思われる方も多いだろう。今後とも、このような奈良の寺社が生み出した豊かな信仰に新たな光を当てるような展示を心がけていきたい。